

令和3年度ぐんま県民カレッジ「オープンキャンパス」大学等出前講座を開催しました

「ぐんま県民カレッジ」は、県や市町村、大学、高等学校、専修学校、博物館等施設、カルチャーセンターなどの連携により、様々な生涯学習の場を提供する学習サービス提供システムです。今年度も県内の大学等教育機関の連携・協力による出前講座を通して、「ぐんま県民カレッジ」の充実・発展を図るとともに、県民の学習ニーズに応えることをねらいとして開催しました。令和3年10月2日（土）、16日（土）、30日（土）の全3回講座で太田合同庁舎を会場に開催予定でしたが、10月2日（土）については、緊急事態宣言延長に伴い中止としました。

今年度は『発達障がい「支援の必要な子どもとのかかわり方」』をテーマに、子育て世代はもとより、祖父母世代や教育・福祉関係者などにも参考としていただけるよう、「発達の凸凹体験ワークショップ」「発達障がいと生活習慣」という内容で企画しました。講師の先生は、特定非営利活動法人リンケージ代表の石川京子氏をお招きしました。参加者は東毛地域（桐生市・太田市・館林市・みどり市・邑楽郡）に在住・在勤の方で、延べ103名が受講しました。

令和3年10月16日（土）

【内 容】「発達の凸凹体験ワークショップ」

発達の凸凹体験を通して、人は皆違い、脳の特性も様々であるということを学びました。その特性は生涯もち続けるものであり、尊重されるべきものであるというお話をいただきました。そして大切なのは、「特性を変えるのではなく、生活上の困りごとを減らすこと」であるということに気付かされました。



その上で、5つに分類した特性について「困りごとを減らすためには、どのような接し方をしたらよいか？」という視点から、具体例をもとにわかりやすく説明していただきました。支援についても、「子どもの目線に立ったものになっているか？」というお話にハッとさせられました。

令和3年10月30日（土）

【内 容】「発達障がいと生活習慣」

発達障がいなど、生まれつきの特性は基本的には変化しないが、周囲の理解や環境改善により二次的な障がいは変化する。不安と不満と疲れが積み重なるとこだわりが強くなったり、パニックが起きやすくなったりする。日常生活の中で、うまくいっている実感を得ることが大切であるということでした。



そのためには、適切な目標設定が必要である。「パニックを起こさない」ではなく、「パニックが起こりやすい状況や状態を知る」など、本人も周囲も特性を理解し、特性がある本人が生活しやすい状態を目指すことが大切であるということを学びました。

講座全体をとおして

発達障がいの子どもにかかわる保護者や教育・福祉関係者など多くの人たちにとって、その理解と支援のあり方は切実な課題であると思います。本講座では、講師の丁寧でわかりやすい、しかも豊富な経験とデータに基づくお話が受講者の学びを深めたと思います。

発達障がいの知識やこれまでかかわった経験は様々だと思いますが、自分自身の考え方やかかわり方を振り返り、今後に生かそうとする受講者の姿勢を事後のアンケートからも感じることができました。